

國學院大學學術情報リポジトリ

新潟県の天神講：柏崎市と燕市と

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-07 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 石山, 奏美 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00001602

新潟県の天神講

—柏崎市と燕市と—

Study of Tenjinko in Niigata:
A Case of Tubame and Kasiwazaki city

石山奏美

キーワード：天神 新潟 燕 柏崎

关键词：天神 新潟 吞 柏崎

要旨

菅原道真公は日本の平安時代の学者、政治家で栄華を極めた人物であるが、天皇廢立を企てたという謀反の罪に問われ太宰権帥に左遷されてしまい59年の生涯を終えた。その後、都で怨霊として恐れられると天神として祀られ神格化され、現在では日本各地で学問の神として天満宮で祀られている。天神講はその菅原道真公の命日である2月25日に行われる天神祭で、民俗学では子どもたちが習字を神社に奉納する奉納したり米を集めて宿で五目飯を食べたりする風習や、家庭では天神様の掛軸を飾り供物をする行事である。本稿では家庭で行う天神講が新潟県柏崎市と燕市を取り上げ検討する。柏崎市では天神様を年神として正月に飾り現在でも従来の風習を継承しながら、地域の人々で個人宅や店舗の天神様を一般公開する「天神さま街道」が行われている。一方燕市では行政がリードして、天神講の再解釈や簡易化、菓子の普及活動に取り組み、新たな天神講の再興を図っている。柏崎市は民間主導で従来の天神講を、燕市は行政主導で新たな天神講の再興を行うという違いはあるが、どちらも天神講の風習を守るために観光資源化し更に地域活性化に繋げている。

摘要

菅原道真既是日本平安时代的学者，同时也是极尽荣华的政治家。他因计划废除天皇被定罪为谋反后，被降级调到太宰权帅。59岁时逝世。之后，人们认为菅原道真的冤魂在都城作怪，所以将其神格化后作为天神开始祭祀。现在在日本的各地作为学问之神，在天满宫里奉祀。

“天神讲”是以菅原道真忌辰的2月25日祭日而举行的天神节。民俗学的学者认为，“天神讲”是儿童们把写好的字供奉在神社里，然后是收集大米，在轮值的人家里一起吃“五目饭”的节日。同时也在家里挂上天神的画，并且供奉食物的习俗。

本文以在新潟县柏崎市和燕市的家里举行的“天神讲”为中心进行研究。柏崎市继承了正月里将天神作为年神而进行祭祀的传统。这个地区的人们，把个人家里和店铺里的天神公开，进而举行“天神街道”的游行。与柏崎市相比，燕市是行政机关领头，将

天神講再一次进行释意和简化、天神祭的点心进行普及活动等手段，企图复兴“天神讲”。

柏崎市是民间的主导，延续从来的“天神讲”。燕市则是行政主导，兴办新的天神讲。但是两者都为了保护天神讲的习俗，将天神讲的观光资源化，并且有效地利用天神讲，将当地的地域社会活性化。

はじめに

菅原道真公は日本の平安時代の学者、政治家で左大臣兼左大将の藤原時平と並び右大臣兼右大将に任ぜられ栄華を極めた人物である。しかし道真公は天皇廃立を企てたという謀反の罪に問われ、太宰権帥に左遷されてしまい59年の生涯を終えた。その後、都で怨霊として恐れられると天神として祀られ神格化され、現在では日本各地で学問の神として天満宮で祀られている。

天神講はその菅原道真公の命日である2月25日に行われる天満天神のお祭り、天神祭を言う。また民俗学では子どもたちが集まって行う講であり、習字を神社に奉納する奉納したり子どもたちが米を集めて宿で五目飯を食べたりする行事で関東地方と長野県、山梨県、静岡県などに分布している。例えば、静岡県沼津市では1月25日ごろ、子どもたちが宿となってくれる家に米を一合ずつ持ち寄って集まり、夕食を御馳走になった後、半紙に「天神講」などと書いて天神社に奉納している。一方で、家庭で行うものは天神様の掛軸を飾り、供物をするのが特徴的で、習字の上達や勉学の向上を祈願する行事でもあり、北陸地方に見られる。例えば福井県三国町では、「天神様の焼きガレイ」といって、床の間に飾ってある天神様にお神酒と焼きガレイ、それにアズキ粥を供え、夜になって天神様をかたづけることになっている。

本稿では新潟県において天神講が地域おこしの一環として行われている事例を柏崎市と燕市から、その様相について比較、検討をしてみたい。

1. 新潟県の天神講

筆者が確認したところ、新潟県の天神講は主に中越、下越地方に分布していることが市町村史によって確認できた。なお上越地方は第二次世界大戦前に盛んであったようである。

掛軸や天神像を飾るタイプの天神講が多く、例えば出雲崎市では1月25日に床の間に天神のお像を飾り、掛軸をかけお供え物し、子どもたちはミカン・菓子・粉汁を食べ遊び楽しんだ。一方、新発田市では正月24日に子どもたちが夜籠りするタイプも見られる。また佐渡の北狄でも天神籠りをして若者が詩吟や読書で徹夜をし書写を奉納したり、相川では各戸で道真公を祀ったり、子どもは夜に天神社におこもりしていた。

また服部比呂美はこの新潟県の天神祭祀と天神講は次の5つのタイプに分類している(服部比呂美 2018)。

- A 家々で天神を年神として祭るタイプ
- B 天神講で子ども仲間が集まるタイプ
- C 天神講で子ども組と若者組が交流するタイプ
- D 天神経を唱えて祭るタイプ
- E 家々で天神に学業成就を祈願するタイプ

このように複数の形態が存在しており、掛軸や天神像はこれらのタイプの祭祀対象としている。しかし天神経を唱え学業成就を行った地区もあり(吉田町)、服部の分類が適当かどうか今後検討していきたい。

この正月に掛軸を飾る行事は、富山県、石川県、福井県にも見られるがその分布は点在しているが、この天神がいつ、どこで始まったのかは先行研究に明確な指摘は確認できない。しかし新潟県に天神講が根付いた理由は三井田忠明によると、北前船が寄港する先の土地で積荷や情報は、本来の用途や意味を飾にかけ、その土地で新たな地域性を付加していったと考えられ、天神像や天神を祀る風は積荷の1つであったに違いなく、陸路を経由した文化であれば地理的分布はおそらく違った結果になった、と北前船による影響と述べている(三井田忠明 2014)。この習俗のと起源と伝播を明らかにすることも今後の研究課題である。

2. 柏崎市の天神さん

(1) 柏崎の天神講

新潟県柏崎市は中越地方西部に位置し、日本海に面している。

ここでは12月25日から31日までに木像や土人形、掛け軸など飾って正月を迎え、1月25日の初天神に仕舞う風習がある。昭和57年に発行された『西卷家歳時

私録』には、「柏崎では大抵の家で天神さんを飾る。それが人形か軸物かその家々の毎年の慣わしのものである」とあり、また三井田氏によると、「柏崎では昔から「天神さん」と呼び、年神さまとして飾る習慣があります。天神様の掛け軸、木彫りの人形など家ごとの飾り方はさまざま。お供えもリング、干し柿、するめや昆布など色々です。年夜に飾り、鮭の頭や一のひれ、鏡餅やお神酒を供えて家ごとの正業となるものを飾り、家内安全や商売繁盛を願い新しい年を迎えます。そして1月25日の初天神には必ず片付けるというのが共通する習わしです」と述べている(三井田忠明)。ここで着目したいのが、柏崎市では天神様を学問の神ではなく、正月の神としていることである。富山県高岡市山町筋でも大晦日までに天神様の掛軸や木像を飾り1月25日にしまっていて、この地域でも天神様は年神様として認識されているが学問の神としても認識され学問成就の祈願を行っているとともにこれは寺子屋の設立によって天神信仰が盛んになった背景があることが理由の一つに考えられる。しかし、同じ風習を持つ柏崎市がなぜ学問の神と認識していないのかは今後検討したい。

また、柏崎市野田では子どもたちで天神講を行っている。1月25日、野田のコミュニティーセンターの部屋には天神様の掛軸が下げられる。子どもたちは会場に集まると、上級生が道真公の説明をしたり、大人が天神講の風習やかつて子ども行事であったことを説明したりする。

このように柏崎市内では2形態の天神講が見られ、これを服部氏はA家々で天神を年神として祭るタイプとB子どもたちが宿に集まって遊んだり共食したりするタイプと分類している。

(2) 天神さま街道

2010年から毎年1月に柏崎から刈羽、出雲崎で「越後天神さま街道」と称するイベントを行っている。また「天神さまめぐり」とも言われ、期間限定で個人宅やお店で行われている天神様を一般公開している。2018年度は38の個人宅とお店が参加し、各店舗、家庭で個性的な天神さまが見ることができる。

例えばこれに参加している海津家は建築業を営んでおり、天神様の木像や随手の後ろには職人の神様とも知られている「聖徳太子」の掛軸も飾られている。また越後みそ西(西本町店)は代々廻船業と醸造業を営んできた商家で、北前船によってもたらされたとする厨子に入った天神様が飾られている。

「天神さま街道」の取り組みは三井田忠明氏・あつ子氏ご夫妻によって始められた。このきっかけは三井田あつ子氏によると、2007年7月16日に起きた新潟県中越沖地震だと言う。柏崎市は大きな被害を受け、築年数が古い木造住宅が倒壊すると、廃棄物集積所に家具と共に多くの天神人形が捨てられた。このことが三井田氏には衝撃的であり、柏崎市の文化である天神さまの風習を継承したいという思いから「天神さま街道」が始まった。はじめは行政に依頼するも天神は宗教ということで断られ、三井田氏を中心に町の人々自身が協力し合い、取り組まれた。また「天神さま街道」には、イベントに伴って「天神様サミット」も開催され、三井田氏による柏崎市の天神様の風習やその由来についての講話や地域の人による新潟県の各地域の天神講の紹介等などを行った。

三井田氏は、今後は子どもたちに対しても天神さまの風習を継承する取り組みを行いたいと言い、次世代を担う継承者の育成が期待される。

考察

柏崎市では、2007年の新潟中越沖地震によって天神さまの人形が多く捨てられ、これをきっかけに三井田氏によって「天神さま街道」が行われ、現在では町の人々も協力して取り組まれている。また「天神様サミット」では地域の人々に天神さまの話をする事でその普及や継承を行っている。こうした取り組みは、衰退しようとしていた天神さまを守り、年神として祀る伝統的な風習を継承している。また行政はこれを宗教として捉えているため関与していないが、町の人々自身で協力して取り組むことで地域おこしに繋がり、市内外の人々も見学できるイベントとして観光資源化されていることが分かる。

3. 燕市の天神講

(1) 燕市の従来天神講

燕市は新潟県の下越地方に位置し、日本海に面しておらず平地が大部分を占めている。2006年に旧燕市、吉田町、分水町の3市町が合併し現在の燕市が発足した。

合併以前、3市町の天神講がどのように行われていたのか市町村史に基づくと、旧燕市の伝統的な天神講は2月24日には宵天神、25日は天神様の日で、各

地では、床の間に天神様の掛軸や土人形、それに松・竹・梅を飾る。御神酒・灯明・あられ・天神菓子などを供える。子どもたちは、天神様の掛軸の前で習字をしたり本を読んだ後で、天神様の粉菓子や黒砂糖で煎った砂糖豆のあられを食べ、また、線香花火をして遊んだ。

吉田町は2月25日が天神講で、子どもがいる家庭では各家で天神講を行っていた。天神様は習字や入試の神様で、床の間に天神様の掛軸や人形を飾り、松・竹・梅の木と天神講菓子(昔は粉菓子で今は氷砂糖)を供えて、子どもたちは学問や習字の向上を祈った。粟生津では天神様は小豆が好きだと言い、寿司や小豆飯を食べ、夕飯にはのり巻や稲荷寿司、饅頭をふかして食べた。また天神様の掛軸の前ではお経を読んだ。

分水町は2月半ばになると氷菓子が販売され、2月24日は天神様の掛軸を出し、竹・松・ネコヤナギを飾り、寿司をこしらえて供えた。その前で本を読むと頭がよくなるといった。

ここでは供物や食事などの違いが見られるものの、掛軸を飾ることや天神講菓子を供えること、学習や学業向上の祈願をするということが共通していることが分かる。服部のタイプ別に当てはめるならば燕市と分水町Eタイプ、吉田町はDとEタイプに当てはまる。

今日家庭で行われている伝統的な天神講は、燕市出身石黒さん宅では、毎年2月14日頃になると床の間に掛軸と菓子、ほかに筆・ボールペン・鉛筆も供え、25日になると、掛軸の前で学業成就・商売繁盛を祈願している。従来の風習より簡易化しているものの、掛軸を飾り天神講菓子を供える点は継承されている。

(1) 行政主導の天神講の再興

こうした従来の天神講は、他地域から引越してくる人口の増加や掛軸を所持していない家庭の増加などで次第に衰退傾向にあった。しかし2011年に鈴木氏が市長に就任し、鈴木氏自身が子どもの頃に天神講を行った経験から、燕市の天神講粉菓子を市の名物として売り出そうという提案により天神講の再興に取り組んでいる。

①天神講の再解釈

現在燕市は天神講を市のホームページに以下のように紹介している。

「天神講」は、学問の神様・菅原道真公を、命日である2月25日にお偲びし、学業成就や合格祈願、子供たちの健やかな成長を願う風習です。全国各地で様々な天神講にまつわる風習が残っており、燕市の中でも地区や家庭によって違いはありますが、燕市の天神講は、お供えする色鮮やかなお菓子が特徴で、「天神講の菓子を食べると勉強ができるようになる」と言い伝えられてきました。鯛や梅、海老に招き猫、だるまに大黒天など、お店ごとにいろいろな種類があり、主役である天神様の表情もそれぞれお店で違います。皆さんのご家庭でも、色とりどりの天神講菓子をお供えして、春を呼び込みましよう。

と伝統的な家庭の天神講を基盤にしながらも、道真公の神の性格を示して人々の関心を引き付け、粉菓子を強調するといった新たな天神講の解釈を行っている。

②新たな商品の作製

燕市は掛軸を所持していない家庭や子どもたちに向けて、「道真くんキット」を制作した。ホームページに掲載しており、印刷し好きな色に塗り組み立てると完成するという、容易に行える天神講が登場した。この取り組みによって、道真くんキットと天神講菓子を供えて行う家庭が増えたことが「我が家の天神講」(③に記載)からも確認でき、新たな天神講が再興されつつある。

また燕市の教育委員会は燕市を紹介する「つばめっ子かるた」を作成し、「梅一輪お菓子も添える天神講」と紹介し、子どもたちや市民に普及している。これは主に幼稚園や保育園で行われている。

③天神講の宣伝

2011年から「我が家の天神講」の募集をし、市民に家庭で行われている天神講の様子を写真とコメントをつけて応募してもらい、ホームページに掲載したが、2016年から廃止された。このことについて燕市役所商工振興課によれば、「天神講を行う家庭が減っているのも一因にあるのかもしれないが、初めて募集をかけるときは話題になり応募が集まりやすかったが、その翌年以降は注目が薄れてしまい応募を確保するのが困難である」ことによるという。しかしこれだけでなく、天神講を行わない家庭が多いということも廃止に至った原因であると考えられる。

また燕市のホームページには越後つばめの天神講の紹介動画を掲載しており、天神講菓子や天神講菓子の製造工程を紹介しその魅力を伝え市の内外に発信している。

④商業の活性化と祭祀

i) 天神講菓子展とワークショップ

燕市は燕市特有の風習としている天神講菓子(粉菓子・生菓子)にあやかり、2012年より、市内の菓子店と協力し、「天神講菓子の展示販売」を三条駅観光物産センター「三条Wing」や道の駅国上で行った。現在では、岩室温泉観光施設「いわむろや」や燕三条地上物産センター、新潟ふるさと村アピール館も加わり、粉菓子や生菓子、金花糖を展・販売し、市民や観光客に普及している。天神講菓子展の期間中には、道真公の紙細工(道の駅国上)や菓子の色付け体験(いわむろや、三条Wing、ふるさと村)、絵馬やキャンドルづくり(ふるさと村)など子どもたちや親子で参加できるワークショップも開催されている。また天神様の学問成就の性格にあやかっ、て、「9」の字をデコレーションした、豪華な9(合格)のキーホルダー作り体験も開催し、新たなイベントが行われている。

このような市の取り組みを受けて、地域の菓子店や神社でも新たな取り組みが行われている。市内にある「飴屋本店」は、創業は1871年で天神講の菓子は100年前くらいから作り始め、毎年2月になると天神講菓子を販売している。顧客は若い人は圧倒的に少なく、小さい頃の天神講を思い出し懐かしくて買いに來たり、受験生の孫のために買ったりする60代以上の年齢層が多いという。しかし行政によって天神講が再興し始めると、町おこしの一環として従来の天神講菓子だけでなく、受験生に向けた道真公のサブレを販売し始め、新しい天神講菓子が登場している。

ii) 天神講祈願祭の開催

この祈願祭は歴史的なものではなく、2015年1月25日から始まった新しい祭りである。主催する「つばめの伝統文化『天神講を守り伝える』の市民の会」は、戸隠神社の宮司である星野氏が燕市の伝統を守るために、2011年に呼びかけが始まり、翌年に結成された。

この祈願祭は1月25日の午前中に、戸隠神社に隣接している菓祖社の前で行

われる。市内の菓子店が天神講の菓子をつくる時に使用する「木型」を持ち寄り、提供する菓子のお祓いをする。この祈願祭の後、2月より店舗で天神講菓子进行を売り出す。この祈願祭が行われるようになったのは、行政の取り組みによる影響や地域活性化のためである。道真の学問の神という性格にあやかり、受験生は毎年天満宮に参拝や天神講の季節は受験シーズンと重なるといった背景から、お菓子を清め、ご利益があるように願いを込めて菓子を販売している。

(2) 教育の場での天神講

燕市の公立保育園、こども園、幼稚園などの21の施設で天神講行事を行っている。また市内の学習塾、立心ゼミナールつばめ吉田校では合格祈願祭が行われ、受験生に天神講菓子を配っている。

燕市立吉田幼稚園では2018年2月23日に天神講を行った。その日はステージに掛軸を飾り、園児たちの学習帳や鉛筆、天神講菓子を供えた。遊戯室に園児が集まると園長が道真公の話をし、園児は細かく刻んだ生菓子と金花糖を食べた。その後、年長児は掛軸を見ながら道真公を描き、その他の園児は道真公の塗り絵を行った。

つばみ保育園では、毎年2月25日になると天神講が行われる。園児は0歳～6歳の男女であり、天神講に参加するのは2歳～6歳までの園児である。保育士は25日の前日、天神講の掛軸を遊戯室のステージの上に飾り、生菓子や粉菓子を地域の菓子店に依頼し、掛軸の前に供え、花瓶に梅(桃の花)と松をさして置く。3、4歳の年中の子どもは、自身のクレヨンと自由帳、5、6歳の年長の子どもはノートと鉛筆を供える。保育士たちもボールペンなどを供える。天神講当日の朝、子どもたちが遊戯室に集合すると保育士は道真公のお話しをし、皆で良い子になりますように、お勉強ができるようになりますように、健やかに育ちますように、と祈願する。これが終わると子どもたちは掛軸を見ながら道真公の似顔絵を描き、砂糖菓子を食べる。

つばみ保育園の園長谷地晶子さんは、道真公の話は子どもたちに難しいが簡単に話して知ってもらい、また道真公の似顔絵は行事が終わるとすぐに年齢ごとに飾り、保護者が閲覧するときに年齢ごとに絵が上手くなっていることを実感してもらいたいという考えで行っている。また谷地園長の以前の職場では童謡「とりゃんせ」も取り入れてと言う。30年以上前から続けられている行事で、この行

事を行う目的は地域の伝承を受け継いでいき、子どもたちが天神を知るきっかけづくりをするため、毎年繰り返し行うことで子どもたちの記憶に残すためにやっているという。

この事例から、教育の場では従来の天神講を行うと共に、塗り絵や似顔絵作成、道真公の話、童謡「とおoryんせ」と道真公に関する新たな教育活動が行われている。

考察

燕市では衰退していた天神講を2011年に鈴木市長が就任して以来、行政が主導でその再興に取り組んでいる。伝統的な天神講を基盤にしながらも市のホームページには、天神様のご利益、即ち学問の神である性格を主としながらも、春を呼ぶ神・子どもの健やかな成長を見守る神など多様な神の性格を具体的に示し、誰でも容易に天神講が行える工夫をすることで人々の関心を引き付け、粉菓子の紹介の動画で市の内外に発信している。さらに燕市は町の菓子店と協力し、特有の粉菓子を用いた「天神講菓子展」を開催することで、実際に地元の人々や観光客に普及し地域の活性化に繋げている。市は子どもたち自身で取り組める新たな商品を通して、また保育園などでは天神講を導入し道真公の読み聞かせや似顔絵制作など新しい教育活動に取り組むことで定着させ、次世代を担う子どもたちを育成し継承を図っている。

おわりに

柏崎市では従来の天神講を継承しながら市民主導で「天神さま街道」を行い、燕市は希薄になった伝承に対し行政内部主導で天神講の活性化の取り組みを行い、地域おこしに繋げ、天神講を観光資源化している。両市の違いは、柏崎は行政が天神講を宗教、燕市は習俗と捉えている背景があると考えられる。柏崎市は次世代を担う継承者の育成が、燕市は産業や観光の振興と各家庭における天神講の伝承の在り方が今後の課題である。

また燕市と柏崎は近隣の地域であるのに、道真公を学問の神として命日に祭ると、新年を迎える年神と一体化して正月に祭る差異がなぜ生じたのが研究課題となる。

今後は日本海側に視野を広げ、家々で行われる天神講だけでなく天満宮で行われる祭礼にも視野を広げ、天神様が用いた観光資源化がどのように行われているか調査したい。

参考文献

- [1] 三井田忠明 2014年「正月飾りとしての天神さん—新潟県柏崎市の正月行事—」『高志路』第392号 新潟県民俗学会
- [2] 服部比呂美 2018年「天神祭祀と天神講」『國學院雑誌』第119巻第2号 國學院大學
- [3] 出雲崎町史編さん委員会 1987年『出雲崎町史 民俗・文化財編』
- [4] 新発田市史編纂委員会 1972年『新発田市史資料第5巻 民俗(上)』
- [5] 相川町史編纂委員会 1986年『佐渡相川の歴史資料集8「相川の民俗I」』
- [6] 柏崎市史編さん委員会 1986年『柏崎市史資料集 民俗篇』
- [7] 燕市 1990年『燕市史 民俗・社会・文化財編』
- [8] 福井県 1984年『福井県史資料編15民俗』
- [9] 吉田町 2002年『吉田町史資料編6 民俗』
- [10] 分水町 2013年『分水町史 資料編IV 民俗・人物』